

報告 3

平城宮跡の活用と未来

奈良文化財研究所 企画調整部 岩戸 晶子

こんにちは。ご紹介にあずかりました企画調整部、展示企画室長の岩戸^{いわと}晶子と申します。今日はよろしくお願いいたします。

実は私は 15 年ほど奈良国立博物館に勤めておりまして、6 年前に奈文研に異動して参りました。奈文研の中ではまだまだ若造ですが、これまで 5 年間ほど神野さんがおられる都城発掘調査部で発掘に従事しておりましたが、昨年 7 月から展示企画室に異動してきて、博物館のキャリアを生かしつつ展示等の仕事を担当しております。

はじめに

みなさんは、「展示」というと、どういうイメージを持たれるでしょうか。おそらく今、「博物館」という言葉も出しましたけれども、展示ケースの中に瓦とか土器が展示してある、それを皆さん行ってみられる、そういうイメージではないでしょうか。

私が展示企画室に着任しまして、あなたの業務はこういう業務です、という引継ぎを受けたときに、奈文研の中にある平城宮跡資料館という展示施設、そこでの展示業務というのはもちろんですが、それだけではなく、遺跡博物館、遺跡の活用というのもやってくださいというふうに言われました。それまで奈良国立博物館のほうでは遺跡の活用ということには全く触れていなかったものですから、一体これはどうしたものだろうと思いました。

展示企画室に着任して 1 年ほどの短い期間ではあるのですが、その間に考えましたことと、奈文研が平城宮跡でおこなってききましたさまざまな活用のこれまでを振り返りつつ、今後の平城宮跡の活用、未来を考えたことを聞いていただけたらと思います。

1. 文化財の活用の基軸

「文化財の活用」というのは最近ニュースとかテレビとか新聞でもよく目にする言葉ですが、「文化財の活用」とはそもそも何なのでしょう。これについて、本当にシンプルに言うと、どんな



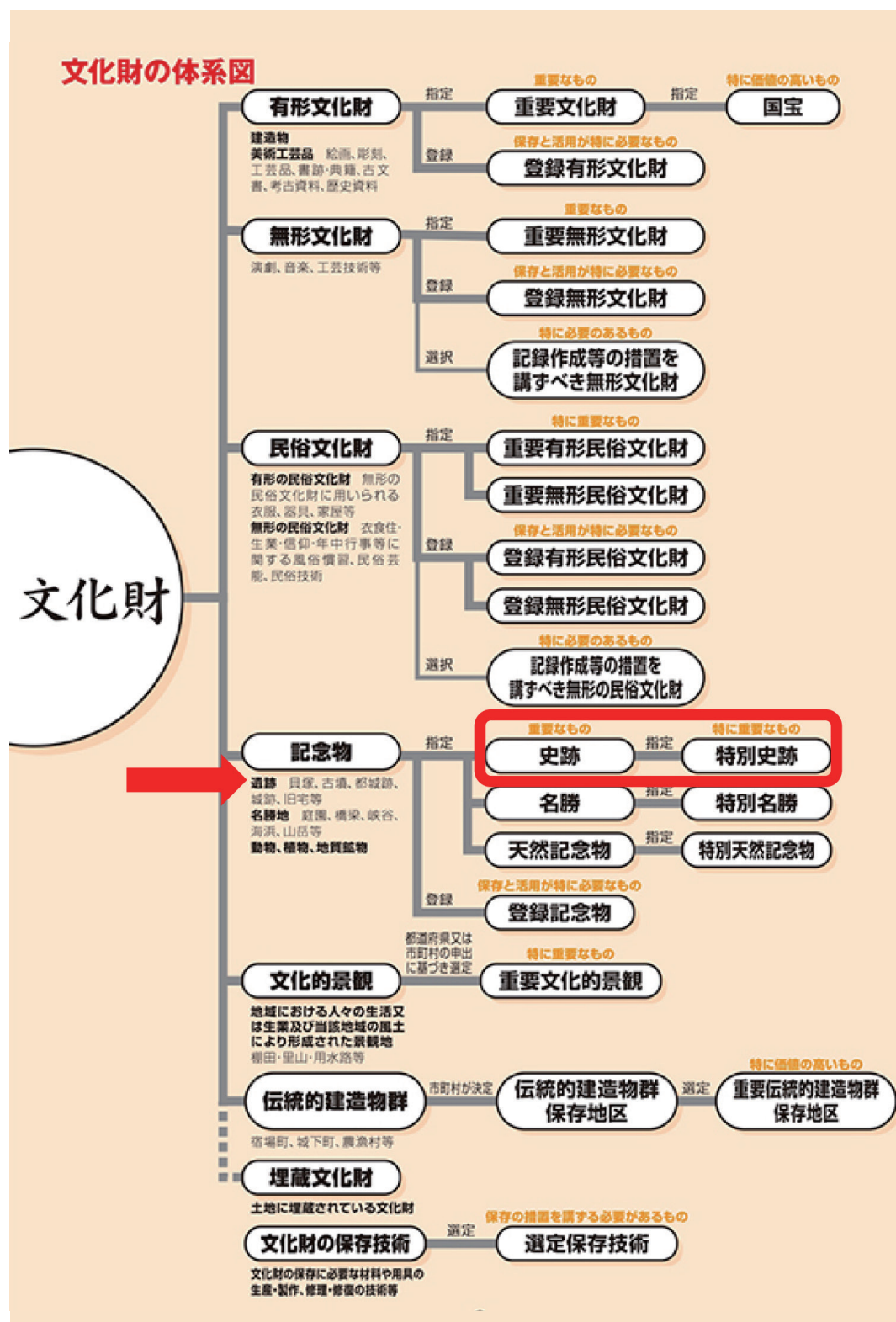


図1 文化財保護法が定める文化財の種類（文化庁ホームページより一部改変）

年齢層の方も、お子様から大学生、それから中年の方、そしてお年寄りの方も、それからどんな職業の人も、研究者レベルの方、それからアマチュアで研究されている方、もしくは全く歴史に興味ないような方も含めて、それから最近では日本人だけではなくて海外の方にも、それぞれの立場、それぞれの立ち位置でその文化財について知っていただいて、ただ知っていただくだけでなく面白そうと思ってもらう、楽しいと思ってもらうこと、それが文化財の活用ということではないかと私は思っております（図2）。

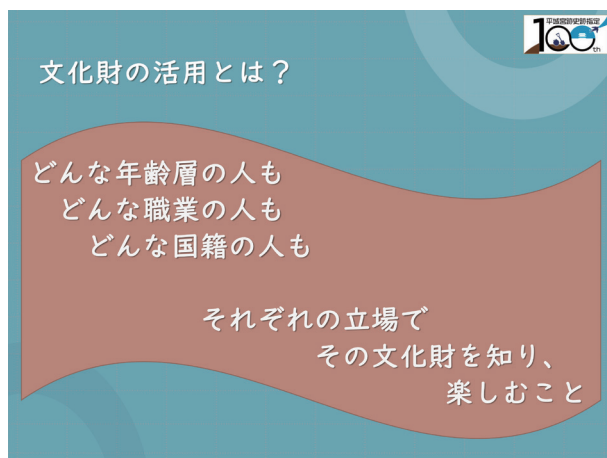


図2 文化財の活用コンセプト

文化財と一言で言いましても非常にたくさんの種類があります。図1は文化庁のホームページにあるものですが、本当にいろいろな種類の文化財の区分があります。今日は平城宮跡に限りますので、図1赤矢印の「記念物」についてのお話になります。この記念物という括りの中に「遺跡」が含まれており、その中で特に重要なものが史跡に、その中でより重要なものが特別史跡に指定されます。

今日はこれまで誰も言っていないですが、平城宮跡は史跡指定 100 周年であると同時に、特別史跡に指定されて今年が 70 年目にあたる年でもあります。ちょうど 30 年の間隔で指定されたことになります。特別史跡というのは、美術品でいいますと国宝に当たりますので、特別史跡と史跡は、国宝と重要文化財の關係に非常に近いと思っておりますが、平城宮跡は単なる「史跡」ではなく「特別史跡」であるわけです。

今日は遺跡の活用、平城宮跡の活用ということで、ちょっと出土遺物は横に置かせていただきまして、遺跡の活用についてお話しさせていただきたいと思います。遺跡の活用注目してみると、これまでその活用というのは3つの軸で大きく動いてきたと思います。

まず、最初に、そこにこの遺跡があるということを知っていただくこと（図3①）です。それは、遺物が分布しているとか、発掘調査をしたとか、さまざまな調査を経て、ここに遺跡があるということが分かる。それを知っていただく。

次に、その遺跡が一体どういうものなのか、何時代のものなのか、どんな性格なのか、それを知っていただく（図3②）。

3つ目に、その遺跡に一体どういう価値があって、どういう意義があるのかということを知っていただくことで

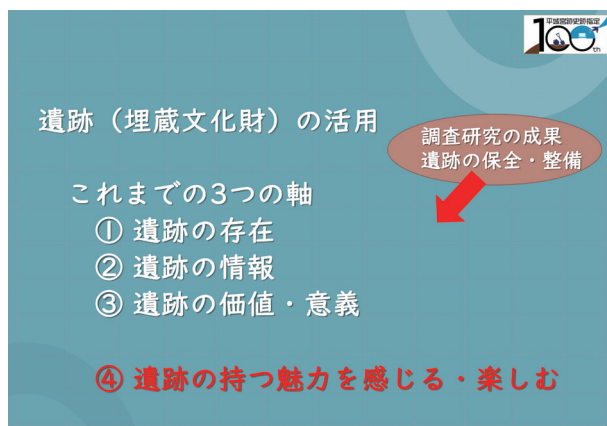


図3 文化財の活用の基軸

す(図3③)。例えば地方との関係、例えば古代の国際交流を示すとか、そういう意義や価値を示す。

このように段階を踏んで、情報をご提供して知っていただく、そして、それに関心を持っていただくということが遺跡の活用ということで、これまで文化財の世界では様々な活用の方法が取られてまいりました。

今お話ししたように、この3つは、やはり調査・研究—そこに遺跡があるとか、何時代のものだとかいう—の成果に裏打ちされませんと、そのような情報をご提供できないですし、活用にもつながらないということになります。また、そこに遺跡があるということが分かれば、それを見に来られる方もいますので、その遺跡を保全したり整備したりということも必要になってきます。

今日は、内田さんという遺跡整備の専門家、発掘調査担当の神野さん、それに活用担当の私の3人が選ばれたというのも、この3つがお互いに関わり合いながら、文化財というのは活用して前に進んでいくんだということを表しているといえるでしょう。

昨今、これにもう一つ新しいフェーズが加わりました。それは遺跡の持つ魅力を感じる・楽しむということです(図3④)。そういう活用を目指した動きが出てきています。令和元年(2019)、文化財保護法が改正されましたときにも、やはり体験とか体感とかそういう言葉で、観光も含めて文化財を活用していくというような方針に舵が切られております。

ただ、③と④の間には大きな差があります。図3の配置では、わざと離してあるのはそのためなのですが、①から③というのは、やはり事実の積み重ねによるものです。④はそれを踏まえて、ちょっとレベルが違う話になりまして、単なる事実や知識の伝達ではなく、どのように文化財を楽しんでいただくかというところで、これまでとは違う活用の仕方などを考えていかなければいけないという段階に来ております。

2. 特別史跡平城宮跡の活用の歴史

ここで、これまでの平城宮跡の活用の歴史を振り返ります。実は 120 年ほど前までは、平城宮跡の存在というのは、ほとんど忘れられておりました。すでに終わってしまっていますが、平城宮跡資料館で今年(2022年)の春に開催しました特別展でそのあたりを詳しく紹介しました。120年ほど前までは、平城宮蹟^{けんしやう}・保存運動の中心人物として有名な棚田嘉十郎さん、この方は今の奈良公園のあたりでお仕事をしていた方ですが、そのあたりの人でさえも奈良の都が具体的にどこにあったか知らなかったというのです。

図4は江戸時代中期の絵図です。この下の四角い部分が平城宮を表してい

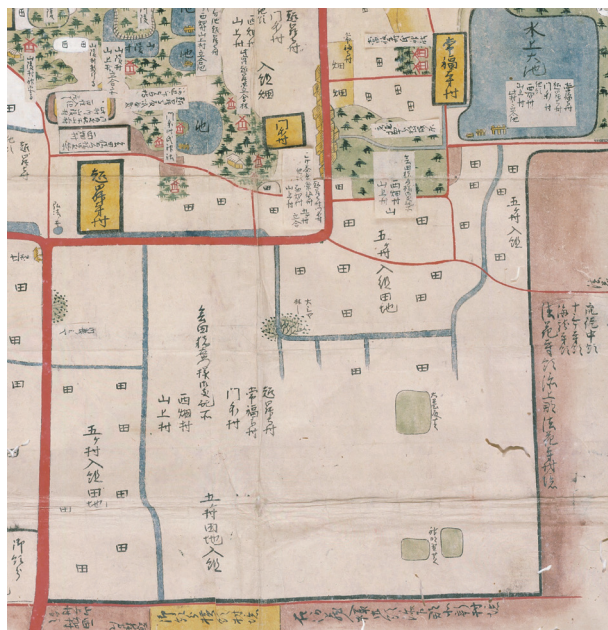


図4 五ヶ村絵図(江戸時代中期)歌姫町自治会所蔵(奈文研 2022)

るのですが、ここには全く平城宮の「へ」の字も出てきません。右下あたりに見えるこの緑色の四角いものが、先ほど内田さんのお話でもありました、残っていた土壇を示すものです。そういうものは残っているのですが、周りは全部水田になってしまって、ここが昔、奈良の都だったということは一切忘れられていたわけです。棚田嘉十郎さんがここへやってきたときには、地元の人たち、都跡村の人たちしか知らなかった。地元の人々たちが、ここに宮があったということを口伝くちづたで伝えていただけで、奈良を含め全国のほとんどの人には忘れられていたのです。

そういう中で、先ほど内田さんからのお話にもありましたが、関野貞という方が研究をおこない、明治 33 年（1900）、新聞に「古の奈良」いにしえという論考が発表されました（図 5）。これによって初めて、その新聞を読んだ一般の人たちが、ここに平城宮があったということを知ったわけです。この研究の成果を受けて、翌年に、先ほどお話に出ました棚田嘉十郎さんたち有志の人々が標木の建設をします（P.23、図 10）。この標木の建設というもの、先ほどお話した遺跡の存在を知らしめるという意味では、遺跡の活用の一歩と言えます。何も知らない一般の方に、ここに大極殿があった、平城宮があったということを示す最初の一步がこの明治 33、34 年（1900、1901）の動きだったと思われます。これも研究の成果と、そうした活用が一緒にセットになっているという非常に興味深い例でしょう。

大正 11 年（1922）、ちょうど 100 年前です。この年に国によって平城宮跡は史跡に指定されました。平城宮を顕彰したいという地元の有志の人たちの熱い運動が実を結んだわけなのですが、この後、内務省によって調査が実

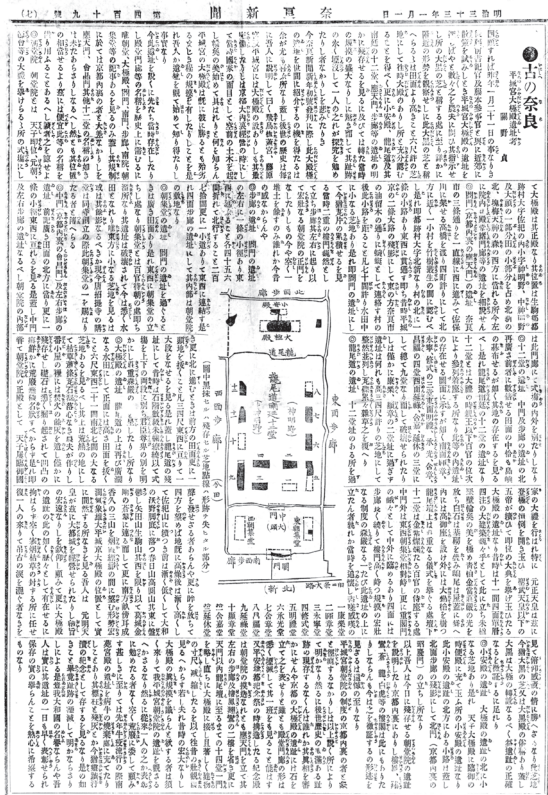


図5 「古の奈良 平城宮大極殿遺址考」関野 貞
奈良新聞明治 33 年（1900）1 月 1 日記事



図6 平城宮跡の各所に建てられた説明版、石碑

施されまして、遺跡整備が着手されます。図6左上は平城宮跡がどういうものであるか、どういう遺跡であるかという、先ほど紹介した図3の②の活用軸です。この遺跡が一体どういうものかという情報を看板にして、説明板にして建てております。そして、右側は「史蹟平城宮跡」と書かれた、より立派な石碑を建てています。

下の写真は、今年の春に撮った写真ですけれども、第二次大極殿の前に建っている「大極殿跡」、それから小さな土壇の前に建物の名前「西廊跡」、こういった石碑もこの大正13年(1924)の史跡指定を受けて国によって建てられたもので、国による平城宮跡の遺跡整備活用の最初、第一歩ということが言えるかと思います。右上の「史蹟平城宮跡」の碑は、近鉄電車からも見えますので、もし今日近鉄電車で奈良から大和西大寺に向かって、お帰りになる方がいらっしゃったら、車窓からぜひご覧ください。

一気に戦後に飛びますが、昭和37年(1962)に平城宮跡を国有化するという方針が立ちまして、翌年の昭和38年(1963)から奈良県によって国の補助金を受けながら、先ほど内田さんからお話があった土壇の復元であるとか、張り芝であるとか、そういった遺跡の整備が行われ、建物の基壇、残っている土壇をより視覚的に分かりやすいよう意図した整備が行われました。

この昭和30年代というのは静岡県登呂遺跡とか千葉県加曽利貝塚とか一考古学がお好きな方は耳にしたことがあるかもしれない、教科書にも載っている有名な遺跡ですが一日本各地でそうした遺跡の発掘調査が行われ、遺跡の整備が全国的にスタートした時期です。

その中で、遺跡とセットで展示館を造る動きが出てきます。今では当たり前のことのように思えるのですが、それまでは非常に重要な遺物が出土すると、国立博物館であるとか、都道府県だったら県立博物館であるとか、博物館や資料館が少なかった時期ですので、そういう大きな施設が所蔵・保管し、展示もそこでされるパターンが多かったのです。そのうち遺跡と遺物が切り離されてしまうことへの反省が生まれ、遺跡とセットで資料館や博物館を造ろうという動きが出てきたわけです。

また、平城宮跡では、県の整備と並行し、昭和40年(1965)以降に文化庁、国による整備が始まります。平城宮跡資料館の建設の他、発掘された遺構というのは普通、調査後に埋め戻して見られなくなってしまうため、それを埋め戻さずに覆い屋をかけることで実際の遺構をそのまま見ていただく遺構展示館も設置されました(図7)。これらは開館して50年を超えておりますが、今も現役でございます。

図8の写真は、何も今の風景と変わらないように見えるんですけども、開館直後の平城宮跡資料館です。右側



図7 遺構を展示した遺構展示館

が開館直後の展示室の様でございます。

この頃、文化庁による「^{いせきはくぶつかんこうそう}遺跡博物館構想」というのが出てきまして、それを受けてこういったものが建設されたということもありますし、遺跡と遺物を一体化して見せるということ、それがまた奈文研の最新の調査成果も併せて見ることができるということで、今行ってみますとちょっと古い感じを受けられるかもしれませんが、その当時としては非常に先進的な展示施設として受け止められていたことがいろいろな資料や記事から分かっています。

また一方で、発掘調査については、昭和 30 年（1955）に奈文研として最初の第 1 次発掘調査が行われました。この発掘調査の^{なま}生のデータを実際に見ていただくということで、現地説明会、一般に「^{げんせつ}現説」と呼ばれるものですが、これも実は奈文研の場合、第 1 次調査時から行われています。図 9 の写真は、昭和 30 年（1955）8 月 20 日に行われた第一次調査の現説の様子です。当時は「平城宮発掘調査現地報告会」という名前だったようですが、こういった写真も残っております。調査開始の頃から、調査成果をすぐに一般の方に見ていただくというような取り組みが行われていることは、これ自体日本初というわけではありませんが、現在までずっと継続しているという点で非常に珍しいことで、当時としても主だった調査で全て現説を実施するということは非常に先駆的な活用の動きだったと思われます。現在、コロナで中断しておりますが、また再開の折にはぜひ足をお運びください。

先ほどから神野さんや内田さんの発表でも出てきておりますが、遺跡が埋め戻されてしまった後、そこに遺跡があったという情報をどのように一般の方々にお伝えするか、その方法をいろいろ奈文研として試行錯誤してきました。初期の方法が先ほどツゲじいの話



図 8 開館まもなくの平城宮跡資料館
(左：1976 年、右：1970 年撮影)



図 9 平城宮発掘調査 現地報告会（平城宮第 1 次調査）
1955 年 8 月 20 日撮影



図 10 ツゲの植栽による遺構表示（左上）と
復元して遺構表示した井戸（右下）

にもありました、ツゲの木を植えるという方法です。柱の穴が見つかった位置にツゲの木を植えています。なぜツゲの木かというと、根が下に伸びていかに横に伸びていくため、埋め戻した遺構を壊さないということで選ばれております。現在も復原された第一次大極殿の北側、各所でこのツゲによる遺構表示を見ることができます(図 10 左上)。また、一部井戸などを復元して、解説板をつける。こういった遺跡の整備も行われております(図 10 右下)。

図 11 は、昭和 58 年(1983)の空中写真です。中央にあるのが第二次大極殿の基壇になります。先ほど述べられていた明治時代に標木が建てられていた土壇にあたりますが、その後、基壇自体も整備されています。その北側、あと東側にツゲによる遺構表示が見えます。今は、国営公園として樹木も一つの景観といいますか、公園の一要素となっておりますが、当時はまだ植栽がそれほどないために、空中から見ますと非常にきれいに遺構表示が見える状態となっています。図 11 の画面上方が、第一次大極殿院のあたりです。この写真では、何も建っていませんけれども、ここに現在、第一次大極殿院が復元されているという、そういう位置関係になります。

それから、90 年代の初めには、今、双子の官衙^{かんが}ということでご紹介あった兵部省、式部省で建物の基礎だけを復元して遺構表示をした例があります(図 12)。これも横を近鉄電車が走っているので電車から見えますが、こういった様々な遺跡を埋め戻した後に、そこにどういった遺構があったか、どういった建物跡があって、どういうものが発見されたのかということを伝えるために様々な工夫や試行錯誤がされていたことが分かります。

こういった延長線上に復原建物がございまして、最初に大型の本格的な建物として復原されたのが平成 10 年(1998)の朱雀門になります。今年(2022)3月に竣工しました第一次大極殿院の大極門に至るまで、今お見せしてきたような遺構表示の延長上にこういった復原建物があるということになります。

さらに言うと、朱雀門など復原建物が点在していたものが、現在これから大極門の東側に東廊^{ひがしろう}ができて、さらに回廊ができて、点から面になっていくような、そういう復原が進められてい



図 11 第二次大極殿の基壇及び周辺の整備状況(1983 年)



遺構表示の一例：建物下半の復元(1991)
(上：兵部省、下：式部省)

図 12 兵部省と式部省の遺構表示(1991 年)

くように進化してきたとも言えるか
と思います。

こういった復原や整備の手法はその都度その都度考えてやっているわけではありませんで、非常に大きな軸が、先ほど神野さんのお話にもありました昭和 53 年（1978）、文化庁によります『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想推進計画』（本書 P.34、図 8）というものの中で示されております。その中で、「平城遺跡博物館構想図」というのがありまして、先ほどゾーニングされているというお話がありましたが、どの部分に展示公開施設を造るか、この部分は手つかずで残すエリア、この部分は復原建物でエリア全体を復原するエリアというようなことを色分けしている図になります。昭和 53 年（1978）ですから、もう 40 年以上前の構想になりますが、これを基にして現在も平城宮跡全体の整備や公開、活用ということが動いているという、非常に大きな軸となる図になります。

またその基本構想では、平城宮跡というのが一つのフィールド、調査研究の手法を向上するための拠点として、また調査研究の成果を反映させて一般の人にお見せするような公開活用、公開展示の拠点として、さらに国民各層が古代の都城を体験的に理解する場ということをやっております。またさらに、遺跡の保存整備、それから遺構の保護、修復であるとか、そういった実践的な応用や技術を蓄積していく場にしようということもうたわれています。

この構想は、40 年以上前のものでありながら、先ほどご紹介した、近年高まってきた文化財の体験とか体感とか、そういうようなことも見据えた構想になっているという、非常に進取的な考え方が既に含まれています。こういう構想に従うべく、奈文研の中でも、発掘、遺物に携わる考古学の専門家だけではなく、復原建築の建築案や遺跡整備の方針を検討する専門家、景観を研究する専門家、そういった様々な専門家が集められて、様々な角度から平城宮跡に対してまなざしを送っているということになります。

そうした様々な分野からのアプローチを受けながら、遺構や遺跡というものを壊したり傷つけたりせずに適切に保全しながら、かつ一般の皆様方に活用していただく、楽しんでいただくというような計画を考えております。

3. これからの平城宮跡の活用

平成 30 年（2018）に国営公園化ということで平城宮跡歴史公園が開園いたしました（図 14）。先ほどの基本構想を基に、奈文研だけでなく国、国も国土交通省と文化庁、その他、奈良県など様々な機関が平城宮跡の活用に関わっておりまして、協同しながら保存活用を図っております。これだけの様々な機関が関わっているだけに、多彩な活用、切り口があるわけですが、学術面では奈文研が関わりまして、そこは担保しながら活用を図っております。



図 13 平城宮跡の建物復原による遺構表示

さて、本来であれば平城宮跡資料館での展示もちろん公開活用ですのでご紹介するところですが、今日は体験ということで最近おこなっておりますイベント、プロジェクトを簡単にご紹介したいと思います。

一つは、かりうちプロジェクト。これは奈良時代のある土器、ちょっと特徴的な土器が出土したことから、奈文研の研究員が古代のボードゲーム「かりうち」を復元いたしました。^{まんようしゆう}『万葉集』であるとか、外国の事例などを集めて研究し、その盤面やルールまで復元し、これを広く普及させようということで動いているプロジェクトです。右下のような簡易キットを作り、昨年（2021）11 月には朱雀門前で一般の方を募集して、大会を行いました（図 15）。

図 16 は、^{あかまいけんじょうたい}赤米献上隊。これは兵庫^{やぶぐん}県養父郡というところからお米が税金として平城宮に納められたことを示す木簡が実際に平城宮から出土しております。それを基に地元の^{やぶ}養父市立八鹿^{ようか}小学校の生徒さんが地元の方々と一緒に赤米、つまり古代米を栽培し収穫して、みなさんと平城宮に納めに来られるというものです。これはかなり長い間続いているイベントですが、単に文字だけで地元のお米が平城宮に納められていたということを知るだけではなく、子供たちが実際に収穫し、それを奈良まで持ってくるという体験をすることによって、より子供たちには実感という形で奈良時代を感じられるのではないかと考えております。実際に、奈良時代の衣装を子供たちも着まして、奈文研の職員も古代の役人や女官に扮して、赤米を献上する儀式を行っております。

3 つ目は、これは木簡を書いてみましょうとか、人面墨書土器を描いてみましょう、こういう



図 14 平城宮跡歴史公園の開園式（2018 年）



図 15 かりうちプロジェクト



図 16 赤米献上隊

ような体験イベントも行っておりま
す（図 17）。

最後です。昨今、デジタル技術を
援用しようという動きもございまし
て、一からソフトを作るというのは、
なかなか難しいのですが、これは A
R といいまして、実際にある景色に
C G をかぶせるような技術を用いた
ものです（図 18）。大極殿の前に旗
や幡が立っているというのをスマホ
であったりタブレットであったり、
そういった端末を通して体感する
というようなものです。体や視線を動
かしますと、実際に景色も動きます。

新しい層に関心をもっていただ
くよう、YouTube であるとか、それ
から SNS、特に Twitter であるとか、
こういったものも使って、奈良から
離れている方、もちろん外国の方も
情報を知っていただくよう、こう
いった広報や情報拡散も最近少し
づつ動き出しています（図 19）。

それと、先ほど神野さんからもご
紹介いただきましたけれども、特に
子供さんとか若い層に平城宮跡を
知っていただきたいということ、あ
まり難しくなく取っかかりやすく
するということでこういうキャラク
ターも発表しています（図 20）。

遺跡や文化財を楽しむというとき
には、やはり主観や感性による
ところが大きく、見て感動するかどうか
— 美術品などはそういう楽しみ方
になるかと思いますが— 文化財を楽し
むというときにはやはりある程度の
知識と、それにプラスして想像力を
かきたてるような、そういう楽しみ
方になるのではないのでしょうか。

遺跡博物館自体、日本にはたくさんありますが、これだけの広さ、それからそこに含まれる情



図 17 木簡や人面墨書土器を書いている体験イベント



図 18 デジタル技術を援用した活用の取り組み



図 19 インターネットや SNS を用いた発信情報



図 20 平城宮跡史跡指定 100 周年を機に誕生した公式キャラクター キュートぐみ【宮都組】

報量という意味では、平城宮跡に代わるものありません。佐藤先生もおっしゃっていたように、1,300 年前の遺跡がこれだけ良い状態で残っていて、またそれがこういう形で保全され、活用できるという遺跡はおそらく世界に類^るがありません。私自身、平城宮跡は「奇跡^{かたまり}の塊」だと思っております。残っているということも奇跡ですし、今こうやって私たちの目の前にそのままの状態であるということも奇跡だと思います。

一般の方々も、生まれたときからもう平城宮跡というのがありますし、史跡にも既に指定されていますので、皆さんはそれが当たり前と思っているかもしれませんが、ぜひ平城宮跡にもっと注目していただいて、これからもどんどん進化していきますので、今後にもご注目いただきたいと思います。

私の発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

引用文献

奈文研『のこった奇跡のこした軌跡－未来につなぐ平城宮跡－』 奈良文化財研究所 70 周年・平城宮跡史跡指定 100 周年記念特別展展示図録、2022 年